

アイキャンだより

2004年7月
第35号



特集 フィリピンの子ども達の現状を伝える



里親プログラム	松岡 亜湖 p.2-3	ご協力者のご紹介	p.12
給食プログラム	佐藤 未希 p.4-5	初心者のためのフィリピン講座(食事篇)	
次世代育成プログラム	佐藤 未希 p.6-7	里村 京子	p.13
サンイシロの子ども達の暮らし	所 尚美 p.8	ICAN 喫茶室紹介	あずき p.13
フィリピンフェスティバルに参加して		会員になって ICAN を支えよう!	p.14
所 尚美・宮本 伸一・鈴木さやか	p.9-10	新規会員、会員継続者のご紹介	p.14
サバイタヨ報告	田代 綾 p.11	事務局報告と予定	p.14
カードキャンペーン報告	p.12		

ICAN (アイキャン) 特定非営利活動法人アジア日本相互交流センター

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 1-20-11 NPO プラザなごや2F

TEL&FAX (052)582-2244 E-mail: info@ican.or.jp ホームページ: <http://www.ican.or.jp/>

2004年の新しい奨学生をご紹介

松岡 亜湖

ICAN では、ミンダナオ島ジェネラルサントス市で、里親プログラムをおこなっています。このプログラムは、一定収入に満たない家庭の子どもの就学を支援するもので、学費・学用品費・医療費等を提供します。

奨学生のサポートは、現地団体の Love&Life.Inc (以下 L&L) がおこないます。代表のアンジーさんを中心に、ソーシャルワーカーのガーリーさんと事務員のインダイさんが、家庭訪問やレポートの作成等をおこないます。



里親支援では、年に 4 回、奨学生と家族の全員が参加しておこなうミーティングがあります。6月19日のミーティングでは、270名が参加しました。

ミーティングでは、しつけやL&Lの規則についての話、奨学生の発表(ダンスや歌など)、バレーボール、野球など皆での遊びをおこない、ランチには、パンシット(フィリピン風焼きそば)やレチョン(ブタの丸焼き)などを食べます。今回は、23人の1年生と、2人の3年生の新しい奨学生の自己紹介もありました。恥ずかしがってお母さんのスカートに隠れてしまう子どももいました。

2004年は、新規の奨学生を含めて160名の子どもの就学を支援します。フィリピンは6月が入学・進級シーズン。子ども達がしっかり勉強できるよう、サポートします。

新規の奨学生から、Ariel さん、Erajean さんの 2 名をご紹介いたします。



Ariel Besar Tajores さんはダンスやバスケットボールが大好きな、かわいい男の子です。4人兄弟の3番目の男の子で、上には小学校高学年のお姉さん、下には2歳の妹がいます。

お父さんは、ダバオからジェネラルサントスに仕事のために来ました。彼は米やとうもろこしを運ぶ仕事をしています。お母さんはイロイロ出身です。結婚してから2人は、サンロレンゾ・コミュニティに住むようになりました。

7月には Dengue 熱にかかり 5日入院していましたが、無事回復し、今は元気に学校へ通っています。

Erajean Pigaさんは、Labangal に暮らす 6 才の女の子です。お父さんは漁師ですが、魚が採れないことも多く、収入はわずかです。子どもが小さいので、お母さんはまだ外で働けません。

Erajeanさんは、5人兄弟のしたから2番目で、高校生・小学生のお兄さんがいて、まだ赤ちゃんの弟もいます。幼稚園では、動物や花の名前、数字、色、アルファベットなどをしっかり勉強しました。家族も、彼女のことを誇らしく感じています。

これから小学校でもますます勉強しようと、彼女は張り切っています。



奨学生は、日本からのサポートを受けて学校へ行けることを、とても喜んでいますが、ミーティングを通じた人間関係もできています。L&Lの会計担当のロドルフォさんは、得意なスポーツを通じて子ども達との交流を充実しようと、張り切っています。7月には、野球を通じた交流もおこなわれました。

現在里親会員は 35 名足りず、追加募集をおこなっています。子ども達への就学支援・自立支援がいっそう充実するよう、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

里子のレポート翻訳サービス スタート！！

里親会員へのサービスとして、現地から届く英文プログレスレポートの和訳をおこなうことになりました。翻訳ボランティアのお力添えをいただき、無料のサービスです。子ども達の情報を日本語で詳しく読みたい方は、ぜひ、この翻訳サービスをご活用ください。

お問合せ・お申し込みは ICAN 事務局まで。よろしくお願い致します！

<ICAN喫茶室のご紹介！>

はじめまして&こんにちわ。ICAN喫茶室管理人のあずきです。

サイト「ICAN喫茶室」はICANの一里親会員である管理人がICAN会員による会員のための交流所を目指して立ち上げたものです。ICANに関する話題なら、里子自慢も所得税控除もなんでも歓迎。

「ICANにでてくるこの単語がわからない」「所得税控除って何？」「他の人はどんなふうに里子に手紙を送っているの」という方には用語集・豆知識・質問掲示板などのコンテンツをご用意しております。

キリバンイベントではICANフェアトレード商品のプレゼントも企画しておりますので、ぜひ一度覗いてみて、プレゼントとフィリピンのお母さん達を励ますチャンスをゲットしてください。

ホームページアドレスは http://www.geocities.jp/ican_sato/です。

管理人のように名古屋から遠い地域に住んでいる方も近い方も、一緒にICANについて語りませんか？

ICAN の給食プログラム

佐藤 未希

ICAN では、今年度、バウイング小学校、ピーキンダット小学校、サリフモクシン小学校の 3 校で、給食支援を行います。
各学校の栄養調査(体重、身長測定)の見学をしたので、報告致します。



フィリピンの小学校は 6 月から新学期になります。新学期が始まって、まだ入学の手続きや、転校の手続きを行っていて、クラス全員がちゃんとそろうのには時間がかかりそうでした。また、どの学校も生徒の数が多く、椅子や机が十分ではありませんでした。ひとつの机を何人もの子どもでシェアしていたり、椅子がなくて、教室の隅に座っている子どもや、立ったまま授業を受けている子どももいました。

各子どもの年齢と体重によってフィリピンの教育省の健康と栄養センターが定める基準に沿って 1 人 1 人の子どもの基準値を出します。10 歳以上の子どもは体重と身長を組みあわせて計算して出された Body Mass Index の数値で基準値を出します。基準値は、Below Normal、Normal、Above Normal の 3 段階に分かれます。ICAN で給食を支援するのは Below Normal の子ども達です。

ピーキンダット小学校:

1 年生の栄養調査の見学をしました。一クラス子どもが 50 名程で先生が 1 人なので、大変です。1 年生は 4 クラスまでありました。測定は日本の様に保健室で行うのではなく、体重計を各教室に持ち回して、各教室で行われます。体重計は、日本の一般家庭にある普通の体重計です。ただ、プラスチックの部分が汚れていて数字が読みづらかったです。

先生が 1 人 1 人名前を呼び、呼ばれた子どもだけが前へ出てきて、体重を量ります。体重計に乗っている子どもの上からのぞかないと正しい数値がよめないなので、なかなか大変です。身長測定は、紙の目盛りのメジャーが各教室に貼ってありそれにみんな背中をつけて測っていました。

子どもによっては初めて体重計に乗るような子もいて、後ろ向きだったり、靴をはいたままだったり片足だけだったりと様々な子どもがいました。

バウイング小学校:

3 校の中で一番町から離れています。約 20 キロメートル離れているそうです。生徒数も一番多く今年度は 1200 名以上。これに先生がたったの 20 名です。椅子、机のみではなく教室も足りていません。生徒の多くはイスラム教徒なので給食のメニューには気を使うそうです。(イスラム教徒は豚肉を食べません)



体重測定は先週購入したばかりの値札もまだ貼ったままの新品の体重計でおこなわれました。しかし先生によっては、ダンボールに入れたままで量っている先生もいて慌てて「それでは正しい数値が量れないから」と外に出してもらいました。子どもによっては体重計が怖くて泣き出してしまいう子もいました。

バウイング小学校は、ピーキンダット小学校より山の中にあるせいか、子ども達は細くて、衛生的でない子が目立ちました。多くの子どもが履き潰したビーチサンダルでした。制服を着ていない子も大勢いて、先生は貧しい子ども達にお金のかかる制服を着ることを強制する事はできないと話していました。

サリフモクシン小学校:

町から約 5 キロほどの場所にあります。まわりはイスラム教徒のコミュニティで、「1人で出歩くのは危ないから」と、体重測定の日にはサンズ校長先生が、車で私を迎えに来てくれて、一緒に学校に行きました。学校に行く途中、生徒たちは校長先生の車を見るとみんなで荷台に乗りこんでいました。

学校に着くとサンズ先生は私の事を生徒に「私の娘よ」と紹介していました。「私と彼女(佐藤)とどっちがきれい？」と先生が聞くと、みんな「彼女」と元気に答えてくれました。

ちょうど朝の全校集会が始まるところで私も参加させてもらいました。ここは一番生徒数が少なく 290 名の生徒に 10 人の先生です。



生徒は学年毎にちゃんと並んでいました。一番はじめに国歌斉唱と国旗の掲揚とが行われます。それから 2 曲ほど歌って、リズムカルな曲に合わせて、みんなで体操していました。その後は、掛け算。代表の子が前へ出てきて、「6かける1は6」「6かける2は12」…とマイクで言い全校生徒がそれに続きます。これを毎日やっているそうです。最後は校長先生のお話。マイクで私の事を皆に紹介してくれました。その後は掃除をして 8 時から授業が始まります。

体重測定用の体重計は、壊れていて量るたびに数値が変わってしまってしまう代物でした。子ども 1 人 1 人がのるたびにいちいち数値を直さないといけませんでした。

子どもによっては、出生証明書を持っていない子もいて正しい誕生日が分からない子もいるそうです。そういう子は後で家庭訪問して、親に事情を聞くと、先生は言っていました。

ICAN のおこなう給食について、給食担当のジェニス先生は、「子ども達の中には朝お腹が痛いと言って泣いている子がいます。どうしたの？と聞くと朝食を食べてきていないそうなのです。そういう子にとって ICAN の給食支援は本当に役に立っています」とおっしゃっていました。ICAN の給食がない日は彼女がいつも多めにご飯を持ってきていて、家に食べるものがない子ども達にわけてあげているそうです。

ICAN の次世代プログラム

佐藤 未希

2004年3月、里親プログラムの就学支援を受けた3人の奨学生、アニリー・アランシナさん、ジェフリー・ラロバイさん、ダリル・バンダランさんが、高校を卒業しました。そこで、ICANでは、地域で有用な人材を育成し、地域の住民自身の手による自立した活動へと転換していくことを目指して、大学進学支援を、試験的におこなうことにしました。

大学へ進学し、気分も新たに勉強に励む、奨学生3名をご紹介します。

高校を卒業した奨学生3名は、今年の4月、それぞれ大学に進学する事ができました。アニリーさんと、ジェフリーさんはラモン・マグサイサイ・メモリアル大学(Ramon Magsaysay Memorial Colleges)へ、ダリルさんはミンダナオ州立大学(Mindanao State University)へ、それぞれ入学しました。

そんな彼らの様子をお伝えします。

ICANが支援する奨学生第1号のアニリー・アランシナさん(Annillie Arancina)の家は、お父さんが脳卒中による半身の麻痺の為、仕事をする事が困難でお兄さんが働いて一家を支えています。アニリーさんは家では、洗濯、料理、皿洗いなど家の手伝いをよくします。

彼女は今年の6月マグサイサイ大学に入学し、文学部の心理学を専攻しました。将来は心理学者になりたいと言っています。

アニリーさんはとてもマイペースな女の子で、大学の入学の手続きに行く時も、一緒に手続きに行ったジェフリー君は自ら進んでどんどん手続きをしていたのに対し、よくわかっていなくて何度もLove&Lifeのスタッフのインダイさんに聞きに来ていました。インダイさんに「しっかりと勉強するのよ！！試験に落ちたら学費の振込みしないからね」と脅されてもあまり気にしていない様子です。

「これから毎日おやつを学校に届けてね」とおどけています。

私の持っているタガログ語-日本語の会話帳を真剣に見て、日本語を覚えています。意外と覚えが良くて、私がタガログ語で「magandang umaga」というと「オハヨウ」と返します。Love&Lifeのスタッフには授業もそれくらい熱心に受けてねと言われ、大笑いされました。それでも、この間フィリピン語の授業のミニテストで、高い点数を取ったと、嬉しそうに私に報告してくれました。

彼女が入学したマグサイサイ大学は町の中にあり、小さい頃から大学や、そこに通う学生達を見ていて、いつか自分もあそこに通う事ができるのだろうかと言っていたそうです。1つの夢が叶った今、今度は次の夢を叶える為に、大学で一生懸命勉強しています。



アニリの時間割

時間:月-金	科目
9:00-10:00	基礎経済
10:00-11:00	フィリピンの歴史・政治
11:00-12:00	フィリピン語
12:00-13:00	人間哲学
土	
7:00-10:00	コミュニティサービス
13:00-15:00	体育

ジェフリーの時間割

時間:月-金	科目
7:00- 8:00	社会科学
8:00- 9:00	社会科学
9:00-12:00	自然科学
—	
土	
7:00-10:00	コミュニティサービス

ダリルの時間割

時間:月・木	科目
7:30- 9:00	英語・文法
9:00-10:30	フィリピン語
14:30-16:00	英語・口語
火・金	
7:30- 9:00	数学
9:00-10:30	人類学
13:00-14:30	哲学
16:00-17:00	体育
水	
9:00-10:30	コミュニティサービス

アニリーさんと一緒にマグサイサイ大学に入学した、ジェフリー・ラロパイ君 (Jeffrey Laropay) は小さいけれどとても活発な男の子です。スポーツも得意で Love&Life で行うスポーツ大会の野球では、いつもピッチャーです。

彼は6人きょうだいの上から2番目です。お父さんが仕事中にビルから落ちてしまい、背骨を折って以来、ハードな仕事できません。お母さんが仕事のある時は、洗濯屋の仕事をしますが、家族8人養うには十分ではなくジェフリー君も家族のために働く事もあります。

大学に通えると言う事に対して彼は大いに誇りに思っており、それが彼の勉強に対する姿勢を更に高めています。大学の入学手続きに行った時も、すでにクラスはスタートしていました。その日は遅くなってしまったので、お金の支払い等は明日にしよう、と Love&Life のスタッフが言ったところ、明日から勉強したいから今支払いをして欲しい、と頼み込み、とても意気込んでいたほどです。そして事実、次の日は朝から学校に来て勉強を始めていました。

教育学科で英語を専攻し、将来は学校の先生になりたいと言っています。

そして今は毎日、とても意欲的に学校に通っています。

ダリル・バンダラン君 (Daryl Bandalan) は身長が高くなかなかハンサムな男の子です。

彼のお母さんは家を出て以来連絡がなく、お父さんは再婚し新しいお母さんと暮らしている、彼は、現在は祖父母と妹の4人暮らしです。とても勤勉で、高校での成績がとてもよく、受験した大学は全て合格しました。

現在はミンダナオ州立大学に入学して、教育学部の歴史を専攻しています。毎日朝4時に起きて、朝ご飯の準備を手伝ったり、水浴びをして清潔にして身だしなみを整えて学校へ行く支度をします。まだ学校が始まったばかりなので、友達があまりいなくて寂しいと言っていました。

高校と違って大学の授業は大変と話していて、毎日家に帰ったら机に向かって勉強しているとおじいさんが言っていました。宿題や、課題も多いそうです。

将来は看護師になりたいのですが、ミンダナオ州立大学には看護学科がまだなく教育学部を選びました。来年度、看護コースが新設されるという話なので、そしたら転科したいと話しています。

フィリピンフェスティバルでのプレゼンテーション報告

今年2月のICANのサンイシロツアーでは、所尚美さん、宮本伸一さん、鈴木彩佳さん、斉藤順子さん、伊佐次歩さんの5人がご参加くださいました。所さんが体験レポートを寄せてくださり、パヤタスやサンイシロで感じたことや学んだことを、実感を込めて語ってくれています。

また、そのスタディツアーの体験報告を、所さん、宮本さん、鈴木さんが、5月に催されたフィリピン・フェスティバルで発表しました。フィリピン・フェスティバルは、5月23日、名古屋国際センター別棟ホールにて第20回フィリピンフェスティバルが開催されました。その行事の様子や感想を、宮本さん・鈴木さんが述べてくれました。

スタディツアーに参加して

所 尚美

フィリピンは貧富の差が激しく、贅沢に暮らしている人々がいる一方、その日食べるものにも困るような生活をしている人々がいると、話には聞いていました。しかし、スタディツアーに参加するまでは、正直「貧富の差」がどのようなものかよくわかりませんでした。

【サンイシロの人々が教えてくれたこと】

ガスも電気も水もない。店も娯楽施設も、もちろんない。見渡す限りの自然、畑、田んぼ。日本での便利な生活に慣れている私にとって、これから始まる5日間の生活がどんなものになるのか想像もつきませんでした。

しかし、そんな不安はサンイシロの人たちの優しさに触れるたびに消えていき、以前からここに住んでいたのではないかと錯覚するくらいでした。毎日子ども達と日が暮れるまで遊び、夜は村の人々とダンスを楽しみました。心があたたかくなるような人とのつながりを毎日感じながら生活することができました。



サンイシロの青年にある質問をしました。「この村に町から入ってきたものの中で一番うれしかったものって何？便利になったなって思うもの。」

私は、彼は絶対にここに唯一ある電化製品（私が知る中では）のラジカセというだろうと思っていました。

しかし彼は「桑と鍬だ。」と答えました。私はその答えを聞いた時とても驚きました。便利で楽できることが幸せなこと＝電化製品がある暮らしだと当然のように思っていた自分が少し恥ずかしく思えました。

生活を豊かにするのは、物に頼って楽できることではない、家族と過ごせること、協力する中で喜びを分かち合いながら生活できること、全てのものに感謝をしながら生活しているサンイシロの人々に本当の豊かさとは何かを教えてもらったような気がします。

【スカベンジャーという生き方】

パヤタスではごみを拾って生活をしているスカベンジャーとよばれる人々と話をすることができました。お世辞にもいい生活とは言えない。家族5人が窓もない7畳程度の1室で生活をしていて、ごみが売れなければその日食べる食事もなしだという話を聞いて少しショックを受けました。「昨日の夜から何も食べていないのよ。朝にコーヒーを飲んだだけなの」そう言って微笑んでいる家族を見て胸がつまる思いでした。

「どうしてごみを拾って生活しなければならないのですか？手に職をつけて別の仕事をしようという意欲はないのでしょうか。」

と、思わず現地で支援をしている方に、たずねてしまいました。

「学歴がないから仕事がない。手に職をつけるようにも日々の生活に追われて余裕がない。意欲がないというのはパヤタスの人にとっても失礼だ。ここの人々にはチャンスがないんです。」

との答えに言葉を失ってしまいました。

パヤタスに住む人々は、好んで、劣悪で危険な仕事をしている訳ではありません。チャンスがないという現実が、貧富の差を深刻な問題にしていると感じました。



今回のスタディーツアーでは、フィリピンの持つ様々な姿をみることができました。教育問題、少数民族への差別、貧困……。国の歴史や文化が複雑に絡み合っている問題は、すぐには解決できないものばかりです。しかし人は毎日生きていかなければならない。サンイシロや、パヤタスでおこなっているICANのプログラムすべてが、そこに住む人々にとってどれほど助けになっているか実際にみてよくわかりました。

私にはフィリピンの様々な貧困をみた責任があるのです。知らなければ感じなかったフィリピンの問題を、今はとても身近なものに感じます。今あの子はどうしているのかな、今日は十分に食事を取ることができたのだろうかと一人一人の顔が浮かんできます。

スタディーツアーに参加できて本当によかったと思っています。日本での暮らしの中でも今の気持ちを忘れることなく、出会った人々から教えてもらったことを胸に刻みながら自分ができることをフィリピンのためにしていければと思います。

フィリピンフェスティバルに参加して

フィリピンフェスティバルで、スタディーツアーの体験報告をさせていただきました。

ICANが行っているサンイシロでの山村教育プロジェクトやパヤタスでの医療補助や職業訓練の現場を実際にみて、その支援を受けている方々との交流を通して感じたことを発表でき、私にとって、国際支援について改めて考えるよいきっかけにもなりました。また他団体のスタディーツアーの発表を聞くことで、フィリピンという国の様々な顔を知ることができました。知ることで初めて気付くことが多くあります。今まで国際支援という大きなものに対して個人がどのように関わればよいのか、それが直接誰にどんな利益をもたらすのか不明でした。しかし、今回のスタディーツアーの参加や、他団体の発表を実際に聞いたことで、1人の支援がいかに大切であるかを学ぶことができ、感謝しています。

私は、実際にフィリピンの貧困を見た責任を自分と同じような疑問をもっている人や何をしたらよいか悩んでいる人々に伝えることで果たしていきたいと思っています。海の向こうで起こっている問題は決して私たちにとって無関係ではないことをいつも心に刻んで自分ができる国際支援をしていければと思います。

フィリピンフェスティバルに参加して

宮本伸一

フィリピンフェスティバルにて、僕たちはフェアトレードのブースを置かせてもらい、シンポジウムのフォーラムの席で、3月のスタディツアーの参加報告をさせていただきました。準備のため ICAN インターンの斉藤さんと、週一回の事務所での打ち合わせ、パワーポイントの作成などに取り組み、準備を進めていきました。



当日は午前中にシンポジウムを迎え、トップバッターをきって、発表させていただきました。まず ICAN が取り組んでいる活動について説明し、サンイシロでの生活について話しました。次にパヤタスでの体験を話し、最後に同じくツアーに参加した鈴木さん、所さんにツアーを通しての感想を述べてもらいました。かなり緊張した15分間でしたが、サンイシロやパヤタスの生活、そこで起きている現状、ICANの活動が集まってくれた方々に少しでも伝わってもらえたら幸いです。

フェアトレードブースでも、プログラムとプログラムの間にはたくさんのお客さんがきてくれました。フェスティバルを通して、多くの人にまたICANのことを認知していただき、またフィリピンに少しでも関心を持ってもらえていたら、嬉しいです。

フィリピンフェスティバルシンポジウムに参加して・・・

鈴木 彩矢佳

今回、ICANのメンバーとしてシンポジウムに参加させていただき、ツアーでの経験を、多くの人に知ってもらえたことを嬉しく思います。私たちの発表はツアーの内容と感想というものでした。ここでは最後の感想をご紹介します。

「フィリピンにはさまざまな顔があった。大型ショッピングモールや高いビルが立ち並び、日本と変わらないような生活をしている都市部の人々。ほんの少し移動した所に巨大なゴミ山があり、そこでゴミを拾って日々の生計を立てている貧困部の人々。山岳部には農業で生計を立てているため不安定な生活をしている人々もいる。

このツアーでフィリピンを始めて訪れた私は、ここは本当に同じ国なのかと疑いたくなった。自国の人々はこの現状をどのように思っているのか？問題意識は高まらないのか？同じ国の人々がこれ程苦しんでいるのに・・・。とも思った。しかしそれは私達にも向けられる疑問なのだと感じた。同じ地球に住む人々がこんなにも苦しんでいるのに・・・。と考えても何も不思議ではないのだということに気づいた。

どこに住んでいるのか、どこの国の人間なのか、どんな生活を送っているのか全く関係なく、この人たちの力になりたい、と思った人がアクションを起こせばいいのだと、ICANNに関わる人々を見ていて感じたことだ。どんな時でもどんな場所にしようとも、そういった気持ちを持ち続けていること、そしてそれを行動に移すことが大切だと思った。私達は貧困をまのあたりにした責任を果たす義務があるのだ。

フィリピンで見えてきた事実を少しでも多くの人に知ってもらえるよう努めることが、フィリピンの人々の暮らしによい影響をもたらすと信じて、これからの生き方に繋げていきたいと思う。」

6組が参加した今回のシンポジウム。それぞれに自分達が見てきた、体験してきたフィリピンを報告し、また新しいフィリピンの姿を知ることができました。同時にフィリピンの人々が抱える問題も、新しく知ることができ、そこから、私の体験したこととの繋がりを考えて、フィリピンの人々の生活をもう一度考えてみたいと思います。

<Happy New Year Cardキャンペーンご報告>

給食プロジェクトの対象校、P.Kindat小学校、Bawing 小学校とSarif Mucsin小学校の子ども達をHappy New Year カードで励ますカードキャンペーンをおこないました。

おかげさまで、子ども達に大きな励ましを送ることができます。いただいたカードは、今回は、ミンダナオ訪問ツアーの参加者に直接届けてきてもらうことになりました。

皆様のご助力に、心より感謝申し上げます。

【ご協力いただいた皆様】

杉本知嘉子さん、杉本佳菜子さん、吳さん、古賀千枝子さん、神谷さん、和田さん、沼崎さん、堤さん、古賀藍美さん、日比野さん、ECC高等学院の皆さん、青山さん、白倉さん、熊本さん、猪瀬さん、竹宮さん、久保さん、和田さん、大船渡中学校の皆さん、栗川さん、篠原さん

【集まったカンパ】 円 ご協力ありがとうございました

ご協力者

文房具寄付(ミンダナオの子ども達に送ります)	未使用テレカ(ミンダナオの給食支援に活用します)
松本さん、戸田さん、明光中学校の皆さん、大橋さん	佐藤さん、平見さん、ECC 高等学院の皆さん、吳さん
集まったご寄付 3,650円	集まったご寄付 8,100円 相当
書き損じハガキ(サンイシロの教育支援に活用します)	商品券(事務局運営費に活用します)
吳さん、高山さん	沼崎さん
集まったご寄付 3,570円 相当	集まったご寄付 1,380円 相当

ありがとうございます！

みなさんこんにちは！はじめまして。現在パヤタスで SabayTayo(サバイタヨ)という子どもたちに対するプロジェクトにボランティアとして関わらせていただいているフィリピン大学の田代綾です。今年の4月から一年間の交換留学で、大学では Community Development と Educaiton のコースを専攻しながら ICAN で毎週土曜日のパヤタスでの活動にボランティアとして参加させてもらっています。

Sabay Tayo は、主に以下の四つ(①Leadership training ②Health Education ③Values Formation ④Sports & Game)を柱に毎週交代でいろいろなアクティビティを子どもたちと一緒にやる活動です。Sabay はタガログ語で「一緒」、Tayo は「わたしたち、みんな」という意味で日常の会話の中でもよく使われるフレーズです。「みんな一緒に」というこの言葉は、スキンシップ好きで、仲良しなフィリピン人によく似合っていて、私が大好きなもののひとつです。初めてパヤタスに行き、活動に参加した日も、少し緊張気味だった私に、子どもたちもお母さん方もみんながとても優しく接してくれて、とても安心することができました。

通常のアクティビティの中では、子どもたちが自発的に選んだというリーダーの子たちが大活躍で、グループをまとめたり、小さい子の面倒を見たりしています。自分自身にリーダーという自覚を持たせる事で子どもたちの行動が変わってきたようです。また、その他の子どもたちも、みんな元気に参加してくれています。今月(6月)から学校も始まって、みんなで学校でしていることを話したりもします。みんなの前で、「僕は、私はこんなことをしているよ！」と話す子どもたちはとても嬉しそうです。彼らはこれから、次の世代を担っていく大切な存在です。そして、たくさんの可能性、人を思いやるやさしさにあふれています。そんな彼らの良いところをいっぱい引き出してあげられるような、そんな時間がつくれればいいなと思います。子どもたちがいつも毎週のこの時間を楽しみにしてくれているので、これから開発教育や環境教育などの手法も取り入れて、充実させていきたいです。

サバイタヨの楽しい時間がある一方で、子ども達が生きていくフィリピン社会の厳しい環境(雇用の厳しさや貧富の差)は、なかなか改善されません。子ども達の家庭の収入もごみ拾いに依存しており、家屋も、危険なゴミ山の近くにあるのです。

これから、様々な現実が、子ども達の前に立ちはだかることでしょう。だけど、フィリピンの厳しい現実を前に、日本人ができることには、限りがあります。

それでも、子ども達のきらきらしてる笑顔、かわいい大きな瞳を前にすると、心から願わずに入られません。

(わたしたちみんな、ばらばらになりませんように。)



初心者の為のフィリピン講座～ Vol.3

食事・給食編

里村京子(元青年海外協力隊)

「ブソック ナ アコ！」

挨拶以外で覚えた最初のフィリピンの言葉だったと思います。意味は、「お腹がいっぱい！」。この言葉を何度も繰り返さないと際限なく食べ物が出てきてすすめられます。「お客様をお腹すかした状態で帰してはいけない！」というのがフィリピン流のおもてなしみたいです。

1年に1度のフィエスタ(村祭り)では、借金をしてまで食べ物を準備して親戚や知り合いをもてなします。準備する方も大変ですが、もてなされる方も大変です。同じ日に複数の知人から誘われると行く先々で……。行っておきながら食べないわけにはいかないので、お腹のスペースを上手に確保しながら回らないと大変なことになります。「ブソック ナ アコ」。自分を守る為にも、良好な人間関係を保つ為にも、なくてはならない言葉です……。

「ミリエンダと食事」

3度の食事と10時、15時のミリエンダ(おやつ)。フィリピンの人は食べることをとても大切にしています。どんなに大事な会議中でも、時間になるとおやつが配られ、一番偉い人がしゃべっていてもバリバリ、ざわざわ……。どうして誰も怒らないのだろう?と不思議に思うくらいですがフィリピンの人は誰も怒りません。フィリピンでは、食べる時間より優先される事柄はあまりないのかも知れません。

ミリエンダ(おやつ)と言ってもサンドイッチやスパゲッティ、ビーフンなど結構ボリュームがあります。食事の中心はご飯(お米)で、パンや麺類は食事とは認められないようです。私はお昼に1ペソ(約2円)のパンを2,3個買って食べるのが好きだったのですが、「それはスナックでしょ?ご飯は何をたべるの?」と何度も聞かれ困ったことがあります。



「給食」

日本の学校には給食がありますが、フィリピンの学校には給食はありません。お昼には一度家に帰って昼食を食べます。先生たちも帰ってしまうことが多いです。ただ、家に帰っても食べるものがない子、家が遠いのに家に帰るための交通費がない子は学校に残っています。

食べることをこんなにも大切にしているフィリピンの人たちですが、食べるものに困っている人もたくさんいます。絶対的な摂取量の不足や栄養の偏り、寄生虫の関係で栄養状態が悪く、身体の大きさも標準よりも小さい子供がたくさんいます。栄養状態が悪いために脳の発達に影響がある子供もいます。ICANの栄養改善プログラムや給食プログラムがそんな子供達の栄養状態を少しでも改善してくれるといいなと思います。

<<会員になってICANの活動を支えよう!>>

(ICANの活動は会費と寄付金で支えられています。事業会費・事業寄付金は20%が運営費、80%が事業費となります。正会費、運営寄付金は全て運営費となります。)

<ご支持頂けるものを選んで御参加下さい。> (1~4は事業会費、5は正会費です)

(1) 貧困家庭のための里親制度(年会費1万8千円)

一定収入に満たない家庭の子どもに学費・学用品費・医療費等を支援します。1対1の支援です。

(2) ミンダナオの小学校での給食提供(年会費6千円)

少数民族の小学校で、先生や保護者の方と一緒に、栄養不良児に給食を提供しています。

(3) パヤタス支援(年会費6千円)

ごみ拾いで生計を立てている住民が多くすむパヤタスで、職業訓練や医療支援を行っています。

(4) 山村教育支援(年会費6千円)

山村サンイシロで、先住民のために、未就学児童やハイスクール生の教育支援等を行っています。

(5) ICANの運営等の活動全般へのご支援(一般会費3千円,維持会費1万円)

活動全般を支えて頂く正会員です。翻訳や事務局を手伝って頂くボランティアも募集しています。

会費と寄付金のお振込先

郵便振替) NPO 法人 ICAN, 00850-6-78233

UFJ銀行) 名古屋駅前支店 普通 2361021 NPO 法人 ICAN (エヌピーオーハウジンアイキャン)

E-BANK) 支店番号 210 口座番号 7001258 特定非営利活動法人 アジア日本相互交流センター

JAPANNET BANK) 店番号 001 口座番号 4005809 特定非営利活動法人 アジア日本相互交流センター

7月以降の予定

8月18~24日	フィリピン海外研修
8月18~24日	ミンダナオ訪問ツアー
10月11日	AHIオープンハウス
10月23日	豊明国際交流フェスタ
10月23~24日	三重国際交流フェスタ
10月29~31日	ワールドコロボフェスタ参加

お問い合わせは、ICAN事務局まで (受付時間: 火~土 13時-17時)

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 1-20-11
NPO プラザなごや2F

TEL&FAX: (052)582-2244

E-mail: info@ican.or.jp

ホームページ: <http://www.ican.or.jp/>

新規会員、会員継続者のご紹介(2004年4~7月)

<新規会員>

維持会員: 熊谷晃子さん

<会員継続>

一般会員: 長町諭さん、水戸市郎さん、田村陽子さん、雨森孝悦さん、佐藤全弘さん、里村京子さん、串田春代さん、山田幸正さん

維持会員: 小園直樹さん、北御門広子さん、月ヶ瀬あずささん

里親会員: 高井充さん、五百川伸枝さん、林和慶(かずよし)さん、川嶋健市さん、鎌田啓祐さん、岩元功さん、高井信夫さん、宮澤潤・高橋景子さん、濱田こはるさん、大平一誠さん、篠田祐三さん、花房範子さん、野口繁雄さん

給食会員: 網白淳一さん、早川潔さん

山村教育会員: 渡辺由紀子さん、早川潔さん

ご支援、ありがとうございます!